

年次報告（案）に係る審議会委員からの意見

五十音順

委員名	意 見
明石 委員	○ 昨年は、さくらんぼ収量に対する商品化率が例年になく少ない年になった。しかし、農協、市場関係者の努力のおかげで単価が良く、やっと経費に見合った農業経営ができた実感している。激しい気象変化による経営は難しくなっていく一方だが、本県のフルーツを守っていくためにも、「高温障害」に重点を置いた補助事業の推進を早急に拡大してもらいたい。 ○ ここ数年農業をしていて思うのは、これまでの品目を守るための対策も必要だが、これからの山形県に適した品目に目を向けることも大事である。 ○ 大江町でもスマート農業による普及が進んできている。若手を中心に積極的に農業用ドローンの免許取得を行っているが、取得にかかる経費が非常に高いので、これに対してももっと補助をしていたらと思う。 ○ 最上川支流の月布川沿いに自宅があり、令和2年度の豪雨災害で被害を受けた。そうした災害の際に、県でも積極的にボランティアを募っていただき、普段の生活に早く戻れるような働きかけをしていただけるといいと思う。
浅野目 委員	○ daywork を活用して働き手の確保がうまくいっているのは良いことだと思う。さくらんぼ農家としては、毎度毎度新しい人が来るたびに一から説明しなければならない手間がとても苦に感じることもある。さくらんぼに限らずだが、摘蕾や葉つみ、摘果などの作業の持つ意味（意義）がまとめてあるマニュアル（作業のポイント）があると事前に見てもらい、理解を深めてから来てもらうことができ、効率が上がると思う。そういった資料があればいいと思う。また、さくらんぼ農家で働きたい人向けの講座などがあってもよいと思う。 ○ 農業所得が上がらない要因として、肥料や諸材料などあらゆる物価上昇に加え、人件費（雇用人費）の上昇も大きい。求人を出すにも他より時給が高くないと人が集まらないので、高めの設定をし、お昼を出したり、ガソリン代を出したり負担が大きい。 ○ 長年農業を支えてきた家族経営体→高齢化→加えて多発する自然災害、資材高騰により、（雨よけ）ハウスの老朽化のタイミングでさくらんぼなど果樹の栽培をやめてしまう人がたくさんいる。果樹の栽培を続けるためには、新規だけでなく継続するための補助のほうが必要とされていると思う。やめていく人たちの栽培面積のほうが新規より広いのではないかな。より長く続けてもらわないと耕作放棄地が増える要因となるのではないかな。 ○ 農産加工を行っている業者と生産者のマッチングができる機会がもっと増えるといい。大規模での取引ではなく、小規模で取引できるような機会がほしい。 ○ 大雨の時、だいたい同じエリアで冠水していることが多く、小規模ではあるものの被害を受けている。防災・減災対策をもっと身近なところまで拡大してほしい。
牛尾 委員	○ 今後、つや姫、雪若丸、はえぬき、新品種「山形 142 号」のブランド戦略展開を各方面から十分に検討する必要がある。特に 142 号をどう位置付けるかには十分な議論が必要であると思う。 ○ 各地域で大変優れた取組みが行われていることに感銘を受けた。その上で、今後これらの取組みの展開について 2 点述べたい。 ① これらの取組みが東北農林専門職大学と連携を持つようになれば、さらに素晴らしいと思う。 ② 村山地域の「やまがた野菜・イタリア野菜&フルーツ料理フェア」、最上・置賜地域の伝承野菜消費拡大の試みなどは、仙台のレストランシェフや、百貨店・スーパーのバイヤーにも参加してもらうことも良いのではないかな。

委員名	意 見
坂井 委員	○ 鳥獣被害防止対策について、電気柵等設置への支援の効果が見られるので、今後も続けていく必要がある。 ○ 安全射撃講習会における弾代の支援は、安全のために今後も必要と考える。 ○ 食育・地産地消について、地域に対して自信を持てる活動を持続することで、県民自身の県内産品の愛用、県内需要の拡大につながり意義がある。 ○ 学校給食について、県産品の利用が増加しているのはすばらしい。今後も増加するよう続けてほしい。
玉谷 委員	○ 「やまがたフルーツ 150 周年」のロゴマークは大変わかりやすく美しい。是非とも首都圏の店舗などでも活用してほしい。 ○ 令和 7 年度はサクランボが多く実ることを祈っている。双子果なども市場に出ても良くなることを期待する。 ○ 新規就農者数が最多とのこと。全体的な農業者が減っている状況なので、その就農者が続けていけるような取組みも期待したい。また、新規就農者が継続している事もわかるような調査もあると、「山形で新規就農しても怖くない」と思えるかもしれない。 ○ 特用林産物のグラフで、「きのこ類」の約半分が「なめこ」となっている。最上地区の「なめこ」メーカー 2 社が、今回の豪雨災害で廃業とのこと。山形県として、何か減少対策は考えているのか。 ○ 地域農業を牽引する担い手の育成について、素晴らしいことだと思う。山形県内だけをフィールドにするのではなく、他県の農業なども学び広い視野を得てほしい。 ○ 鳥獣被害について、鳥獣も「ジビエ」として資源にもなると思う。「食」として活用できるような取組みも期待したい。 ○ 啓翁桜の「植物成長調整剤」を活用した取組みは素晴らしいと思う。省力、高品質ならば多くの農家さんに取り入れていただきたいと感じた。 ○ 「きのこの品評会」は素晴らしい取組みだと思う。「枝豆」「すいか」「山菜」などの品評会があったら、農家さんも頑張れるし、消費者の認知も更にアップするのではないかな。
平田 委員	○ 東北農林専門職大学の開学を喜ばしく思う。人材の確保は、農業界にとっても課題であるため、今後の山形県の農業のための教育を期待している。 ○ 全国の傾向同様、県内でも生産現場の弱体化が進んでいると思う。また、米に限って見れば、長期間、生産を抑制する方向に進んでいたが、生産の向上を目指す時期に来ていると思う。 ○ 人材の問題への対応のポイントは、対象や獲得方法の多様化だと思う。アプリ活用による人材の獲得に注目している。 ○ 米を巡る政策の大転換が近づいていると思う。産地はもとより、販売スタイル、流通も含めた転換期となるような気がする。情勢判断を的確に行えるよう、情報把握に努めていただきたい。

委員名	意 見
峯田 委員	○ サクランボの高温被害対策について、資料中にある「強靱で持続可能なさくらんぼ産地づくりに向けた支援」は、喫緊の課題として迅速かつ実効力のある施策展開を望む。「やまがた紅王」が近く奨励品種となる見通しだが、これらの動きを加速させ、気象リスクを回避させる手だてを推進してほしい。 ○ 県産米に関しても気候変動に対応した体制づくりが必要。 ○ 東北農林専門大学に注目している。農林分野の高度な専門知識を学ぶ場として、全国から学習意欲の高い学生が集まることを期待している。全国の認知度を高める努力をお願いしたい。大学をハブとして関係機関や団体等とネットワークを構築することにも尽力していただきたい。 ○ 生産者の高齢化などに伴って新規就農しやすい環境づくりが急務だろう。新規就農者数に関し、令和6年度の調査分が昭和60年度以降最多となったことは素晴らしいことだが、新規就農した人たちの離職防止にも取り組んでいただきたい。新規就農しやすく、そして新規就農した人たちが離職しない環境づくりに努めていただきたい。 ○ やまがた森林ノミクスは他に例のない本県特有の事業であり、気象変動が激しさを増し、環境保全への関心が高まる中であって、この事業を深化させる取り組みを求めたい。 ○ 庄内地域で取り組む「食の都庄内」を一層推進してほしい。食文化は一朝一夕に育つものではない。庄内固有の自然と歴史と人々の営みなどが重層的に積み重なって「食」が「文化」として昇華したと認識している。庄内の食文化を一層磨き上げる取組みに力を注いでいただきたい。
村山 会長	○ 「やまがたフルーツ150周年」に向けた取組みは、果樹王国山形をPRする絶好の機会になり、すばらしい企画だと思う。様々なイベントやキャンペーンが企画されているようなので、成功裏に終わることを期待している。 ○ サクランボの収穫期ならびに花芽分化期が高温になる年が続き、温暖化対策は必須である。コメの対策は、品種開発を含めて対応が進んでいるように思う。山形県の顔でもあるサクランボについても、令和6年度の収穫量が、高温障害や双子果の発生などの影響で平年比65%となっており、喫緊の課題である。高温対策が示されているが、その効果を周知徹底してほしい。また、さくらんぼ農家には、資材等の購入が困難な農家もいるので、そういう方にも配慮が必要であるように思う。 ○ 資料を見ると、5年間で販売農家数が17.2%減少しており、高齢化の進行が顕著である。新規就農者が昭和60年度の調査以降で最多ということで、県の施策が成功していることを裏付けているように思う。他県では、茨城県をはじめとして、外国人労働者を活用している。本県においても検討が進んでいるようだが、課題もあろうかと思う。農家に対してその点を含めて、しっかり説明し、トラブルなく進めていただきたい。 ○ 現在、受験生人口の減少するなか、学生確保が大きな課題になっている。山形県の大学進学率はそれほど高くないので、その点を解決していただくと、山形大学としても有り難い。また、是非連携させていただければと思う。 ○ サクランボと並ぶ果樹王国山形の顔であるラ・フランスの栽培面積が徐々に減少しているのが気になる。新品種の導入などのブレークスルーが見つかることを期待している。

委員名	意 見
八 鋤 委員	○ 近年様々な気象災害が続く中、特に大雨、洪水によって作物はもちろん、施設、農地など幅広い被害に対応し、支援していただいた。まだまだ完全な復旧とまではいかず、時間もかかると思うが、引き続き、幅広い対策、支援等を実施してほしい。 ○ daywork の活用に広がりが見られ、様々な分野での利用がされてきてとてもいいと思う。更なる成立を目指して広報活動や研修会を行ってほしい。事例の紹介もあると分かりやすく、取り入れやすくなると思う。
吉原 会長 代理	○ 改めて大雨の被害状況が甚大であることが明らかにされており、関係各所の対応や支援に頭が下がる思いである。継続的な支援を期待したい。 ○ 担い手としての外国人材の可能性が示されているが、受入れにともなう課題も現場ではあがっているかと思う。今後とも、外国人材受入れノウハウの蓄積を進めるとともに、そのノウハウを広く共有していただきたい。 ○ 農業生産資材価格指数の伸びに比べて、農産物価格指数の伸びが追いついておらず、生産者の苦境が察せられる。取引交渉力の強化に向けて、優良事例があれば広く展開していただきたい。 ○ 山形県農業経営・就農支援センターの支援体制は充実しているが、利用者にとってのワンストップサービスが可能になるよう、組織間の連携がますます強化されることを期待する。
和 田 委員	○ 水産物の安定供給で養殖、蓄養技術は早急に取り組むべき課題ではないか。船上で活魚技術が漁師の皆さんに浸透してきているので、その先の集めて活かしておく場所の設置が必須ではないか。 ○ 藻場保全について、ウニが駆除対象になっているようだが、ウニは陸上で養殖ができるのではないか。夏の枝豆の廃棄を食べさせて、加茂水産高校で試験的に養殖したことがあったと思うが、ただ海の中で駆除するよりは、養殖の一つに指定してもらえればと思う。雑食であるため、野菜のくずでも大丈夫。枝豆での養殖は、枝豆の甘さがあって美味しいと聞いている。 ○ 浜の磯やけなどが言われている。地球温暖化の影響もあるかと思うが、海の中は海に返すべきではないかと思う。魚の頭、臓物等、海への不法投棄と言われているが、ある場所で海の物は海へと返した結果、その場所に魚が寄ってきて、小魚もいっぱいいると聞いている。お金をかけて焼くより、リサイクルではないが、海の物は海に返すのも検討課題だと思う。 ○ ニジサクラは一部のみに知られているだけで、一般の方々は名前を言っても知らないと思う。私は一度口にしましたが、とても美味しかったので、もっと一般に広がりができるといいかと思う。食べたくても買えるところがないのか、もしくは分からない状況。ごく一部の人が知っているのはもったいないので、もっともっと前面に出して売ってほしい。

※ 折原委員、佐藤（誠七）委員、佐藤（豪）委員、高橋委員は意見なし。